

岩手県胆江地方および和歌山県

農村ワーキングホリデーを活用した都市農村交流の「鏡効果」と農村再生手法としての可能性の検証



【地域の基礎データ】

人口：	131,710 人（胆江地方／令和元年 12 月末現在）
	16,650 人（かつらぎ町／令和元年 12 月末現在）
高齢化率：	31.9%（胆江地方／平成 27 年 1 月 1 日現在）
	38.0%（かつらぎ町／平成 31 年 1 月 1 日現在）
産 業：	農業（稲作、畜産） など（胆江地方）
	農業、製造業 など（かつらぎ町）

【活動の基本情報】

参加学生数：	33 名（1 回生：9 名、2 回生：9 名、3 回生：8 名、4 回生：7 名）
活動期間：	平成 26 年 6 月～
担当教員：	藤田武弘

1. 活動実施の経緯

「農村ワーキングホリデー」は、農業や農村に関心をもつ都市住民が、繁忙期の農作業を無償で手伝う代わりに農家から寝食の提供を受けるというもので、参加者と農家との深い交流を特徴とする“日本型グリーン・ツーリズム”のなかでも、最も「鏡効果（他者との交流を通じてみた日常生活に潜む価値への気づき等）」の高い取り組みである。学生を参加者とする域学連携型の農村ワーキングホリデーは、次世代の若者たちが、農業・農村が直面する地域課題を当事者意識をもって理解する機会を提供するとともに、多世代間の交流による「鏡効果」により地域のコミュニティが活性化するなどの変化が期待されている。

2. 活動の内容

岩手プログラムでは、①「農村ワーキングホリデー実施」（9 月中旬 3 泊 4 日型と 4 泊 5 日型に分けて実施、学生 33 名参加／岩手大学ほか他大学学生 15 名と合同で実施）、②「岩手県農家の和歌山研修受入」（12 月上旬 1 泊 2 日、受入農家 14 名が大学を訪問し参加学生と交流）、③「振り返りセミナー開催」（2 月末に現地開催、教員と学生・卒業生が参加予定）のサイクルでの取り組みが定着している。

和歌山プログラムでは、①「観光ぶどう農園：ジベレリン処理・摘粒作業（6 月上旬）/収穫および観光対応（8 月下旬）」（農家民泊型かつらぎ町、学生 6 名参加）、②「道普請参加（日帰り）」（12 月初旬かつらぎ町、学生 4 名参加）を実施し交流を重ねている。

3. 活動を通じて

各地でのプログラム毎に、①受入農家・参加学生を対象とした事前学習会の開催、②受入農家・参加学生のプロフィールシート作成、③実施中の業務報告と実施後のワークショップ開催、④参加学生のリアクションペーパーを編集した「記録集」を作成（各取組毎に作成）。これにより、地域（受入農家や地元行政）が取り組みの経験を暗黙知に留まらせることなく“可視化”し、持続的な取り組みに発展させることが可能となる。

4. 成果物など



農村ワーキングホリデー



活動目的

- WHを通じた交流の鏡効果が失われた農村の誇りの再生にどう寄与しているのかについて考える。
- 関係人口づくりの効果について考える機会にする。
- 農山村再生の手法としてのWHの可能性についても検証していく。
- 農村、農業の実際に触れることで問題意識を深め、当事者意識を持つ。



主な年間スケジュール



参加学生の感想

私たちの食生活の基盤を支えている農家の方の実態、農村への想いを知ることができた。
(岩手大学3年)



地域住民との交流を通して、本当の課題や解決策は、実際に目になければわからないと実感した。(和歌山大学2年)



今後の課題

- 受入農家
 - ・受入農家の高齢化に伴う受入農家数の減少
 - ・旅行としての楽しさを求めるWH参加学生の割合が増加している
 - ・農家と学生が交流する機会が少ないと感じている
- 学生事務局の運営に関して
 - ・主な事務作業を2人でやっているため、参加学生約40人と受入農家との連携をとることが難しい
 - ・事前事後学習の時間がほとんど設けられていない
 - ・WHを通しての学生同士の交流の機会が少ない

